# 第３５回定期総会を開く

# 新会長に上谷氏を選出

第35回「宿場町枚方を考える会」総会が平成31年3月24日、枚方市立メセナひらかた会館で開催されました。

議案は①平成30年度事業報告並びに決算報告②会計監査報告③会則の一部改正④役員改選⑤平成31年度事業計画と予算で、すべて原案どおり可決承認されました。

**役員改選**

今回の改選では、平成19年年度から6期12年にわたり会長を務めました堀家啓男氏が企画会議委員に就任、新たな会長として上谷勝己氏が選出されました。

提案理由の説明

副会長以下の主な役員は次のとおりです。

副会長…上野幸夫
事務局長…上野幸夫（兼）
事務局次長…伊豆田敏和、松井茂夫
会計…出羽雪子、奥谷佳子
相談役…夛田恵美子
監事…二ノ丸吉武、朝熊達三

## 新会長挨拶

上谷勝己 会長

本会の会長に選出されたことに身の引き締まる思いです。未熟ですが、皆様のご理解とご協力をいただきながら尽力してまいります。いみじくも平成から令和に改元されました。本会も新しい未来に向け、皆様とともに歩んでいく決意です。

第９０号

**発　行**
宿場町枚方を考える会
会長　上谷　勝己
枚方市船橋本町2-87-7
072-857-2995

**事務局**
枚方市出口２丁目6-6
上野幸夫　072-832-5722

**編 集** 広報委員会

## 主な内容

○第35回定期総会　新会長を選出（1頁）
○東蹉跎の史跡を歩く（2頁～4頁）
○阿弓流為と母禮は生きていた?（5頁～6頁）
○二本松少年隊の悲劇（7頁～11頁）
○枚方宿、始めは淀藩の領地（12頁～16頁）

# 東蹉跎の史跡を巡る

出口　上野　幸夫

春の「近郊の史跡を歩く会」は元号が改まって間もない5月19日に開催されました。京阪光善寺駅に集合、23名の参加のもと、今回は特に明治の廃仏毀釈により大きな遺構を失った龍光寺およびその遺物を継ぐ寺院を含めて、蹉跎地域の東側を散策することになりました。

蹉跎地域は明治22年、中振、走谷、出口の各村が蹉跎村として一つになったものですが、蹉跎という地名は学校や図書館などの公的施設以外、残念ながら現在は残っていません。地名を用いることが多い駅名も、光善寺への参詣者が多かったことからか、光善寺となり、蹉跎の名を馴染み薄くした原因の一つになっていますが、蹉跎が歴史と由緒のある地域には変りません。

## 光善寺墓地

### 蓮如上人御廟

光善寺駅を出て東北の方向へ歩くと、入江家の名が刻まれた「蓮如上人御墓東二町」の道標があります。その横を通って行くと、小高い丘の上に墓地があります。入口には檀家の寄贈による大きな石碑「蓮如上人御廟（裏面には、昭和55年建立と寄贈者の連名）」があります。

蓮如上人御廟碑

御廟は石段を登り切った墓地中央にありますが、浄土真宗本願寺派第八世宗主、本願寺中興の祖として偉業を成した上人にしてはやや簡素な造りという感が否めません。廟所は各地にありますが、分骨が収められているかどうかは定かでないようです。

蓮如上人御廟

享和元年（１８０１年）の河内名所図会光善寺の西北隅に「廟塔」が描かれているので、当時は光善寺境内にあったと思われますが、当地へ移転された時期は分かっていません。

## 柿木孫兵衛顕彰碑（墓地内）

彼は若くして出口村の庄屋を務めました。柿木家は近江源氏佐々木氏の一族でその祖重邦は寛永８年（１６３１年）、当地に来住、邸内に柿の木（現存）があったことから柿木と称したと伝えられています。

安政元年（１８５４年）、年貢米を大坂に搬送したとき、安治川口で安政南海地震の津波に遭遇、年貢米の全てが流出してしまいました。不可抗力の天災であったにもかかわらず、責任を一身に負い、全額を弁償し、村民に対しては一切の負担を求めませんでした。これを「報恩、顕彰する碑」として、村民一同が墓地内に建てたのです。

## 旧河内街道

河内街道は明治22年に大阪鉄道の八尾停車場ができたのに伴い、八尾から中河内・北河内にあったそれぞれの集落の道を結び、枚方国道二号線に至る道が整備され、河内街道と呼ばれるようになったといわれています。

河内街道筋　街並み

通りに見かける道標にもあるように、野崎まいりには多くの人々がこの街道を利用したようです。

## 御座山　圓養寺

浄土真宗本願寺派のお寺です。文明年間に蓮如上人が中振郷に巡行、山本惣左衛門方を宿としました。惣左衛門の妻はこの時病で危篤状態でしたが、上人持参の薬を与えると、病はたちどころに平癒、夫婦はともに驚喜して、帰依、弟子となり、法名了有、妻は妙意と授けられたと伝承されています。

圓養寺山門

境内はあまり広くありませんが、鐘楼、太鼓楼を配しています。本堂は、記録では寛文２年（１６６２年）に建て替え、棟札により寛政元年（１７８９年）に再建となっていますが、往時の本堂は老朽化のため平成４年に再建されました。建ちを低く抑え、軒を低くし、親柱に太い安定感をもたした山門（薬医門）は建築様式上から17世紀中頃の遺構といわれています。釣鐘は明治に廃寺となった旧龍光寺から払い受け、先の大戦の供出を経て、返還修復し現存しているとのことです。

## 蹉跎天満宮

神仏分離後は蹉跎神社とも呼ばれています。延喜元年（９０１年）、菅原道真が大宰府へ左遷される途中、山の上で休憩し、都の方を望んで名残を惜しみました。その場所を「菅相塚」といいます（現寝屋川市菅相塚町）。その後、娘の苅屋姫が追いかけましたが、あと少しで間に合わず、足摺り

（蹉跎）して嘆いたといわれています。こうした逸話からこの地域を「蹉跎」と呼ぶようになりました。大宰府でその話を聞いた道真は、三尺二寸の自身の木像を作って娘に送ったとされています。

天暦５年（９５１年）、蹉跎山に社殿を造営して木像を祀り、近隣25ヵ村の産土神としたのが神社の始まりと伝えられています。

蹉跎天満宮　鳥居と楼門

社殿は慶長19年（１６１４年）の大坂冬の陣で焼失しましたが、神像は無事で、中振・出口両村の産土神として再建されました。現在の社殿は明治21年３月に改築されたものです。

## 旧龍光寺（真言宗）

聖徳太子の開創、太子自ら釈迦如来の尊像を彫刻して安置したと伝えられています。開創当時、七堂伽藍は壮麗を極めたと伝えられ、付近の地中から奈良朝前期から鎌倉時代に至るまでの古瓦が出土しています。

延暦４年（７８５年）、火災で焼失し、大同元年（８０６年）に本堂、観音堂を建立しましたが、当初の規模の十分の一にも至らなかったといわれています。

慶長の大坂冬の陣によって蹉跎神社とともに焼失しましたが再建されました。年代は不明ですが、蹉跎神社が中振、出口の氏神となり、寺は同神社の宮寺となりました。残念ながら明治元年（１８６８年）４月の神仏分離により宮寺たる関係を失い、同年６月に廃寺となりました。

当寺の仏像と寺宝は浄土院に移され、釣鐘は圓養寺に売却、廃寺跡は明治初年、小学校に流用され、その後、蹉跎神社の社務所となっています。なお、本会機関誌（本誌）第89号（８～９頁）掲載の「神仏習合と明治の廃仏毀釈」（本会前会長堀家啓男氏執筆）に龍光寺の廃寺となる以前の境内の配置などが詳しく解説されていますので参照下さい。

## 浄土院（浄土宗）

元は蹉跎神社の宮寺龍光寺の歴代住職の隠棲別業道場として真言宗でした。慶長年間に浄土宗光誉上人が再興、さらに寛文７年（１６６７年）に誠誉上人が堂宇を再建、浄土院と称し開山しました。

浄土院山門

本堂脇壇の聖観音は元の龍光寺観音堂の御本尊、また木造釈迦如来座像は龍光寺の御本尊で、ともに聖徳太子の制作と伝えられています。

寺宝として龍光寺旧蔵の涅槃像（裏書正和２年／１３１３年）がありますが、傷みが激しく、残念ながら一般公開はされていません。

# 阿弓流為（アテルイ）と母禮（モレ）は生きていた？

小倉東町　平良 一郎

平安時代初期、東北地方で大和朝廷の統治に服さなかった蝦夷（えみし）は、征夷大将軍の坂上田村麻呂（さかのうえのたむらまろ）の率いる４万人の朝廷軍に敗れ、首長の阿弓流為（あてるい）と副将の母禮（もれ）は同族５００余人を伴って投降しました。

田村麻呂は降将を連れて京に凱旋し、その処置について助命を強く嘆願しましたが、朝廷の命令で、二人は河内国で処刑されました。

この処刑地が現在の枚方市であったようです。地元にとっては、きわめて後味の悪い出来事で、さまざまな伝説を生み、１２００年経った現代も慰霊祭が行なわれています。

処刑地と伝承されている牧野公園（宇山町・牧野阪２丁目）のマウンド上に新旧二つの塚（牧野阪２丁目）があります。この公園は片埜神社（かたのじんじゃ）に隣接しており、昔は神社の境内でした。

旧塚は自然石で文字はありません。風化して消えてしまったようです。

以前は傍らに木製の表示板「アテルイ・モレの墓」がありました。地元では「蝦夷塚」と呼ばれていて、今なお供花が絶えません。

新塚は、阿弓流為母禮之塚建立実行委員会（中司実会長）によって建立された「伝阿弓流為・母禮之塚」です。平成19年3月4日に除幕式が行なわれ、式典には岩手県奥州市からも岩井憲男助役らが参列しました。奥州市は阿弓流為と母禮の生誕地であり、田村麻呂が築いた胆沢城跡（いさわじょうせき）があるなど、二人とは深い縁があります。

塚の揮毫は、田村麻呂の創建といわれる清水寺の森清範（もり せいはん）貫主、塚裏面の説明は、関西外国語大学の瀬川芳則教授によるものです。以後、毎年9月23日を祥月命日（新暦換算）として、伝阿弓流為母禮之塚保存会（中野一雄会長）の主催でア

テルイ・モレ祭りが行なわれています。

昔は斬首刑の後、首と胴を一ヵ所に埋葬すると、怨念が強い場合には蘇生すると信じられていて、別々に葬ったといわれています。伝承では、胴塚は首塚の丑寅方角（北東）３丁（３２７ｍ）の位置、現在の宇山東町にあったことになっています。これは陰陽道（おんみょうどう）の鬼門を意識したようです。このときから１４０年後の関東における平将門（たいらのまさかど）の首塚を彷彿させます。

胴塚の伝承地には表示がありませんでした。昭和63年に枚方市教育委員会が発掘調査した結果、６世紀後半の円墳と判明し、宇山1号墳と命名しました。したがって阿弓流為と母禮が処刑された時代よりも２００年以上古いことになります。その後、マンションの建設によって、胴塚と古墳は消滅しました。

しかし、なぜ彼らは河内国上山（宇山の旧名）で処刑されたのでしょうか？　処刑のために京から30 ㎞も離れた場所まで連れてこられたのでしょうか？　京の処刑場、三条川原や鳥辺野では都合が悪かったのでしょうか？　それだけの理由なら、もっと京に近い場所があるはずなのに。

これらの疑問から始まった考察による研究から「阿弓流為と母禮は生きていた」という新説が出てきました。

坂上田村麻呂は、桓武天皇の側近であり、女官の百済王明信（くだらのこにきし みょうしん）もその一人です。新説は、田村麻呂が明信の父、陸奥守百済王理伯（くだらのこにきし りはく）の依頼を受け、阿弓流為・母禮を助けたというのです。彼は二人の助命を強く嘆願しており、理伯の依頼に応じました。阿弓流為と母禮が陸奥の金山採掘技術者たちに大きな影響力をもっていたのが理由です。

田村麻呂は二人を助けるため、蝦夷の怨霊に対する人々の恐れを利用、新しい都（平安京）ではなく、山城国の外で処刑することにしました。そして河内国中宮（現在の枚方市中宮西之町）の理伯邸からわずか3 ㎞ほどの河内国上山まで連れてきて、そこで処刑をしたと称して、実際は理伯邸へ二人を逃がし、匿いました。そしてほとぼりが冷めてから、ひそかに陸奥へ帰しました。これによって陸奥守である理伯は、従来通り莫大な砂金を確保できることになりました。もちろん理伯から田村麻呂への謝礼も多額であったと思われます。

田村麻呂は、阿弓流為と母禮の処刑をもっともらしく見せかけるために、さまざまな噂を流し、それが現在にまで伝承として残っていると考えられています。この新説は、源義経、織田信長、豊臣秀頼ほか、悲劇のヒーローを殺さないという日本人的な感情にマッチする考え方ですね。

# 白虎隊だけではなかった
# 二本松少年隊の悲劇

三栗　石川　勲

## 福島の旅

元号が改まる少し前、4月半ばに東北の福島県を旅しました。このツアーは「息を呑む名桜・三春滝桜…」と題し、福島の桜見物が目的です。ツアーを申し込んだ時、開花状況はまったく不明でしたが、訪問時の三春滝桜（紅枝垂桜）は満開を迎え、見事な花を咲かせていました。江戸時代は歴代三春藩主（5万石）の御用木として保護され、現在は「国の天然記念物」「日本三大巨桜」の一つになっています。

三春滝桜

余談ですが、三春とは福島県田村郡三春町（みはるまち）のことで、本稿見出しにある二本松の南に隣接しています。ご存知の方もあると思いますが、伊達政宗の正室、愛姫（めごひめ）の出身地です。

このツアーには、白虎隊悲劇の舞台である会津鶴ヶ城（国の史跡名は「若松城跡」）の天守閣（再建）の見学、南会津郡下郷町（しもごうまち）にある大内宿の散策も含まれていました。

大内宿は、会津松平家初代藩主保科正之が整備した下野街道（しもつけかいどう）の宿場の一つで、等間隔で建ち並ぶ茅葺き民家群により昭和56年に重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。

大内宿の茅葺き屋根

これらの見学により、単なる物見遊山ではなく、「宿場町枚方を考える会」の会員としての体面を少しは保てたかなと思っています。

## 二本松市

ツアー最後の訪問は、二本松市にある霞ヶ城（国の史跡

名は「二本松城跡」でした。二本松といえば、かつて枚方でも開かれていた菊人形が、現在も一般財団法人二本松菊栄会（事務局は二本松市産業部観光課）により継続され、毎年秋に県立霞ヶ城公園で開催されています。

## 霞ヶ城（二本松城）

霞ヶ城は室町時代の初期、奥州探題の畠山高国が居を構えたのが始まりです。会津鶴ヶ城と同様、城主の姓は次々と変わりましたが、寛永20年（1643年）に織田信長の家臣だった丹羽長秀の孫、光重（初代二本松藩主）が入城、以後、幕末まで丹羽氏10万石の居城となりました。戊辰戦争で多くの建物が焼失しましたが、明治の廃城令によりすべて破壊されました。

昭和57年に箕輪門と附櫓を復元、平成5年から7年にかけては本丸の修復、復元工事が行われ、城跡一帯は県立霞ヶ城公園として整備され、平成19年7月26日に国の史跡に指定されています。

## 旧二本松藩戒石銘碑

ツアーバス駐車場入口の向かい側に「旧二本松藩戒石銘碑（きゅうにほんまつはんかいせきめいひ）」があります。城跡の指定より70余年も前の昭和10年に国の史跡に指定されています。第五代藩主丹羽高寛が自然石の表面に刻ませたものです。

碑文

爾俸爾祿
民膏民脂
下民易虐
上天難欺
寛延二巳ヲ年春三月

この意味は、「武士の給料は人々の汗と脂の結晶である。民は虐げ易いけれども、神を欺くことはできない。だから民を虐げると、きっと天罰あるぞ」と解釈され、今日においても、教育資料として、行政の規範として価値の高いものとして評価されています。（現地説明板）

## 二本松少年隊群像

ここからが本稿表題の二本松少年隊です。群像は二本松市名誉市民橋本堅太郎氏の作品で、公園の入口近く、二本松城千人溜（兵の集合場所）にあります。二本松少年隊を顕彰するため平成8年7月28日に設置されました。戊辰

二本松少年隊群像

戦争での激戦地となった大壇口（おおだんぐち）の奮戦を表しています。

## 二本松少年隊

会津の白虎隊と同様、戊辰戦争における悲劇の少年兵たちです。正式に編成された白虎隊とは違い、急いで動員されたため当時は隊名などがなかったようです。さらに「賊軍」となった旧藩士や少年隊の生き残りの人々が沈黙を通してきたことにありました。

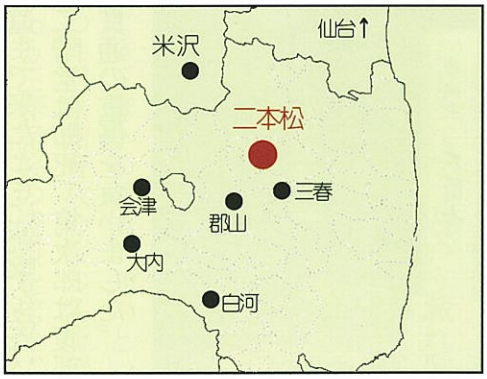
「二本松少年隊」という名称は、大隣寺（藩主丹羽家の菩提寺）で営まれた戊辰戦没者五十回忌法要（大正6年9月15日）にあたり、当時の町助役水野好之（大壇口少年隊生き残り）が刊行した「二本松戊辰少年隊記」をもとに命名されました。少年隊が社会的に認知される始まりでした。

大隣寺本堂

## 幕末前後の二本松藩

二本松藩は、老中阿部正外の失脚（慶応元年）に伴い白河城を所管していました。戊辰戦争が始まると、白河をめぐる攻防に兵の主力を割き、本城の二本松城は空き家同然で、さらに奥羽越列藩同盟（新政府軍に対抗する東北30余藩）の三春藩が慶応4年7月26日（旧暦）に寝返りました。

三春藩との戦闘が不要となった新政府軍は、三春藩兵の先導を得て一気に二本松へ兵を進めました。二本松藩の主力は白河から郡山（現在の福島県郡山市）まで戻ってきたものの、本城の攻防に間に合う状況にはなく、落城の危機が迫っていました。




城内で軍議が開かれました。藩主丹羽長国（明治35年子爵）の正室久子の父である美濃大垣藩主戸田氏正（正室は薩摩藩主島津重豪の娘親姫）から新政府軍への恭順と降伏を勧められていたのです。

軍議は恭順と降伏に傾いたのですが、阻止したのは家老丹羽富穀（にわとみたけ）でした。「信に背むけば人は何と言うか、降伏により藩を存続させても、列藩同盟諸藩が敵に回れば城を守れない。降伏しても滅び、しなくても滅ぶ」「死を賭して信義を守るは武士の本懐」。これにより玉砕覚悟の徹底抗戦が決定しました。

## 少年隊の結成

二本松藩は兵力不足を補うため、少年らの嘆願を受け入れ、急遽7月27日に数え年十二歳から十七歳の少年隊を編成、各隊に配属しました。「二本松戊辰少年隊記」には、城南の要である大壇口に出陣した25名が列記されていますがその後の調査で判明した少年

たちも加えて62名となり、うち戦死者14名、負傷者7名となっています。戦死者に比べて負傷者が少ないのは、生き残りを恥じて届出をしなかったためといわれています。

## 大壇口の戦い

二本松少年隊のうち25名は、丹羽右近が率いる大壇口守備隊の大砲方銃士隊として出陣しました。ここで戦闘が始まったのは7月29日の午前9時前、2時間近い激戦を展開します。しかし、兵力、武器に劣る守備隊の劣勢は明白となり、少年隊隊長木村銃太郎（きむらじゅうたろう22歳／二本松藩砲術師範）は左腕に被弾、太鼓を打って少年隊の退却を指示しましたが、さらに腰に被弾し重傷を負ったため、副隊長の二階堂衛守（にかいどうえもり）の介錯により自刃、以後、少年隊は散り散りとなりました。

当時、薩摩六番小隊長で自らも負傷した野津道貫（元帥／陸軍大将、日露戦争時は第四軍司令官）は明治31年5月、この地を訪れ、「戊辰の役第一の激戦」と評し、敵であった守備隊の顕彰碑（二勇士の碑）を建立しています。なお、顕彰碑が並んでいる現在の大壇口古戦場跡（守備隊陣地）は周辺道路拡幅のため、当時より東側へ移設され、農協施設の横にあります。

## 岡山篤次郎

山奉行の岡山持（130石）と妻なおの次男です。出陣にあたり、母に頼んで身に着けるものすべて、手ぬぐいに至るまで「二本松藩士岡山篤次郎十三歳」と書いてもらいました。その理由を「母が屍を探しやすいように」、自書しなかったのは「字が下手だと敵に嘲笑される」と語ったと伝えられています。

木村銃太郎の自刃の後、副隊長二階堂衛守と大隣寺の参道まで来たときに銃撃を受け、二階堂は即死、篤次郎は腹部貫通の重傷を負いました。

**大隣寺の「二階堂と篤次郎の戦死之地」の碑。篤次郎の正確な死亡地は称念寺。**

新政府軍は篤次郎の幼さに驚き、自軍の野戦病院だった称念寺（奥州探題畠山氏の菩提寺）に運びましたが、治療の甲斐なく絶命しました。

## 落城

岡山篤次郎の被弾から数時間も経たない慶応4年7月29日の正午前、二本松城は自火炎上し、落城しました。家老丹羽富穀以下の重臣は切腹、大城代内藤四郎兵衛は「切腹は降伏と同じ」として、門外へ斬り込み討死しました。

病身ながら城に留まろうとした藩主丹羽長国は、落城前日の28日、無理やり駕籠に乗せられ、正室や娘などとともに米沢へ向いました。長国の世継ぎが決まっておらず、家名断絶を避ける重臣たちの配慮でした。これは結果的に奥羽越列藩同盟に人質を取られたのと同じで、二本松藩には徹底抗戦の道しか残っていなかったのです。

## 少年隊群像婦人像

少年隊群像の後方に裁縫姿の婦人像があります。急な出陣で夫や兄の着物を手直しして、死地に向う我が子のために万感迫る思いで肩印（肩章）として丹羽家の直違紋（すじちがいもん）を縫い付けている母親の姿を表しています。

享年十三歳で戦死した砲手岡山篤次郎の母「なお」がモデルといわれています。母なおは、戊辰戦没者五十回忌法要の直後に死去しています。

## 広田弘道の配慮

称念寺に収容された岡山篤次郎を看取ったのは土佐藩士の広田弘道（伝聞）でした。重傷で半睡半覚ながら「銃を、弾を…」と叫ぶ姿に、「生死の境にありながら意気軒高」と感動し、ぜひ回復させて養子にしたいと望みました。称念寺の過去帳によると、母の墨書により篤次郎の戦死が家族へ伝えられました。彼の遺体は数日後に岡山家の菩提寺である蓮華寺に運ばれています。

広田弘道は反感状（かえりかんじょう／敵を称える書状）を贈るとともに、看護役だった地元の女性に篤次郎最期の様子を家族に伝えるよう頼んでから次の戦場に向いました。反感状を受け取った家族は墓石に刻み碑文としました。

「君が為　二心なき武士の命はすてよ　名は残るらん」
（反感状の歌の部分）

## 三春狐

時代が明治になると、「馬鹿だ、馬鹿だよ二本松は、三春狐に騙された」という戯れ歌が流行りました。今なら人権問題になりそうですが、昭和の中頃までは「三春から嫁をもらうな、嫁に行くな」という言い伝えがあったそうです。

二本松では今も薩摩や長州より三春への遺恨が強いといわれ、県内有数の桜の名所である三春滝桜の資料を求めても、「切らしている」と素っ気ない観光施設もあるようです。

現地でもらった二本松市観光課のパンフ（二本松少年隊）には、「三春藩の背信」、つまり「信頼を裏切ること（広辞苑）」と記されています。

三春藩は、もともと勤皇思想の強い藩でしたが、周辺諸藩との力関係から、やむを得ず奥羽越列藩同盟に加盟していたのです。しかし、「恭順」「降伏」ではなく、「裏切り」「寝返り」だとして批判が根強いのは、今日でも非難の対象となる「二枚舌」「二股」にありました。

三春藩は土佐藩の板垣退助に恭順の使者を送りながら、他方では二本松藩や仙台藩に援軍を求めるなど、信頼を得ていました。こうした策謀は三春藩の置かれた立場から現実的方策として容認し、そして無血開城により藩士や民を戦禍から救ったとして、三春では藩を擁護する声が多いのも事実のようです。なお、白虎隊の悲劇は、二本松城落城の1ヵ月後に起こります。

枚方宿

# 始め淀藩の領地、後に高槻藩の預所

交野市　堀家 啓男

## 淀藩永井家が枚方で領地をもった理由

### 尚政ってどんな人

大坂夏の陣の後、枚方宿とされた、岡新町、岡、三矢、泥町の4ヵ村のほか、淀川沿いの村々は寛永10年（1633年）、山城国、淀藩10万石永井家の領地となりました。永井家は徳川家の重臣で、徳川覇権の確立に多大の貢献をしました。その功により加増のうえ、古河から淀藩の初代藩主となったのが永井尚政（なおまさ）です。

### 淀城ってどんな城

淀城は京都防衛や西国大名に対する重要な軍事拠点でした。このため京都の南西、宇治川のほとりに建てられ、西に桂川が、東に木津川があり外堀の役目を果していました。四方には櫓、五層の豪壮な天守を擁していました。城下を通る京街道には木津川に淀大橋、宇治川に淀小橋が架けられ、いざ戦闘となれば京都を守るため、いつでも落とせるように工夫されていました。

宇治川、木津川、桂川の付け替えが明治になって行われたため、現在では川と離れていますが、城址には天守台や高い石垣、水を湛えた内堀の跡が残っています。

### なぜ尚政の領地に

幕府初期の不安定な時期、尚政はこの城で京都所司代や大坂城代、また弟の永井直清ら近畿八人衆の一人として、いかなる事態にも即応できる武力体制を堅持しました。尚政の領地として与えられた枚方宿および京街道を含む淀川左岸の枚方地域の諸村もその体制の中に置かれたのです。

### 軍事優先の時代から財源の時代へ

尚政は万治元年（1658年）、家督を嫡子、二代尚征（なおゆき）に譲ります。さらに交野郡にあった領地を4人の子に分与（旗本となる）します。そして尚征は寛文9年（1669年）、淀から丹後宮津の初代藩主に移封となります。幕府としては有事には京都は所司代、大坂は大坂城代に任せ、永井家を核とする近畿即

応武力体制を解くことにしたのです。

### 尚政後の永井家は改易

移封後の宮津永井家は二代（宮津藩）尚長のとき、延宝8年（1680年）増上寺法会（家綱の葬儀）における刃傷事件で志摩鳥羽藩主内藤忠勝により尚長が殺害され、城地没収となります。しかし弟尚円（なおみつ）が大和新庄藩（後の櫛羅藩）一万石で再興され明治まで続きます。

## 枚方宿などが幕領となった理由

### 財源の確保を優先

幕府は、平和の訪れとともに消費が増え、財政状況が次第に悪化します。そのため軍事より幕府収入の確保が優先されます。この一環で正保元年（1644年）、尚政領であった茨田郡の枚方宿4ヵ村や淀川沿岸の村が幕府の財源増収のため幕領として上知されます。

### 代官が支配

これらの村は幕府の勘定奉行支配下の代官によって直轄支配（御領という）され、このときから約200年続きます。代官は小禄の旗本が任命され、数年で交代することが多かったようです。代官一人で数万石単位に編成され、代官は支配しやすい地に陣屋（代官所）をおきました。

枚方地域の知行地の約46パーセントは幕領でしたので、各村に代官が任命されました。隣村でも支配代官が異なることは普通でした。代官の主たる業務は年貢の徴収で、各村の庄屋は用事があれば所轄代官がいるはるか遠くの代官所に出頭したのです。

## 高槻藩の預所となった理由

### 「大塩の乱」の再発を恐れた

江戸末期、風雲急を告げる天保11年（1840年）、枚方宿4村と淀川沿岸の枚方、伊加賀、出口、走谷、中振村の5村は、代官小堀主税の管轄をはずれ、淀川対岸の摂津国、高槻藩3万6千石、永井家預所（あずかりどころ）の支配となります。預所支配とは、御領のまま代官の管轄をはずれ、その支配権が近くの藩などに委任されることをいいます。

### 高槻藩永井家の軍事力に期待

この時期、あえて高槻藩永井家の預所としたのは譜代大名である永井家の軍事力に期待したからとされています。代官では幕末の世情で治安維持の不安があったからでした。同時期に高槻藩の預所となった能勢郡は天保8年（1825年）の「大塩の乱」に触発されて発生した能勢一揆の舞台になったところですし、また門真や守口、尊延寺など枚方周辺でも「大塩の乱」に加わった豪農の出身者がおり、京阪間での同様の事件の再発を危惧した幕府の治安対策だったと思われます。

大塩中斎の遺跡碑（尊延寺）

枚方宿は大きな在郷町で、多くの人が出入りし、飯盛女

が多数いる宿場町として風紀上の不安がありました。預所を高槻藩としたのは「大塩の乱」のとき、その鎮圧に同藩も動員され、兵を出していた実績があったからです。反幕派取り締まりのため、元治元年（１８６４年）には枚方宿西見附の近くに高槻藩の警備番所である「御固所」が設置されました。

## 高槻藩永井家の藩祖は尚政の弟だった

### 永井兄弟が畿内近国の八人衆に

預所を命じられた当時の高槻藩主は九代永井直進（なおのぶ）でした。高槻藩永井家は譜代で、その藩祖永井直清（なおきよ）は、淀藩主永井尚政の実弟でした。直清は二代将軍秀忠の側近として頭角を現し、三代家光の時代に兄尚政ともに八人衆の一人として畿内近国の幕政を支えました。はじめ２万石で山城国勝竜寺城に封ぜられ、その後、慶安２年（１６４９年）に加増され三万六千石で高槻城に入城します。

高槻藩は淀川を南に西国街道（近世は山崎通「やまざきみち」という）を北に置く北摂の要所であり、直清は兄尚政と同じく京都に入る要所を守ることとされたのです。直清は大坂城代や京都所司代不在の場合に諸事をつとめる中核でした。高槻藩永井家は歴代十三代２２０年、明治まで続きます。鳥羽伏見戦争では藩主不在の理由で籠城し不戦のまま維新を迎えます。

枚方宿やその周辺の村は幕初には淀藩永井家、幕末には高槻藩永井家という藩祖が実の兄弟である譜代藩の軍事力によって守られ、あるいは支配されるという不思議な縁をもっていたのです。これも枚方宿４村やその周辺の村が京阪間を結ぶ軍事上、交通上の要所として淀川や京街道と深い関わりがあったことによるといえます。

### 三層の天守を擁し城下町を形成

高槻城は、北摂平野の中心にあり、北摂唯一の平城です。幕府の工事で高石垣と土居が廻り、三層の天守がそびえる近世城郭でした。西国街道や淀川右岸沿いを抑える要所として、内堀が囲む天守、本丸、御殿がある二の丸をおき、重臣屋敷のある三の丸（直進のとき藩校「菁莪堂」も置かれる）や出丸、厩郭、蔵屋敷などが配置され、外堀が廻っていました。

城下町は北側、東側に発達し高槻六口を通じて西国街道、茨木、淀川方面などを結んでいました。今も高槻は、京口町、城内町など、城下町ゆかりの地名があり、堀跡、大手

門跡を活かした道路など城下町の風情を濃厚に残しています。藩主の参勤交代は東大手門を出て本町を経由、京口から八丁松原を経て西国街道へ出ました。

元禄４年（１６９１年）、オランダ商館長の江戸参府に同行し、枚方宿を通った医師ケンペルは、淀川の向こう北摂の野に高槻城の天守が見え、たいへん美しく際立って見えたと、感想を記しています。天守を染めて、川面の向こうに夕日が沈む光景はすばらしかったことと思われます。天守は明治の廃城まであったようですが、あいにく写真が残っていないとのことです。枚方の隣にこんな立派な城下町があったのですね。

### 城跡に工兵隊を誘致

昭和６年（１９３１年）８月、秩父宮（昭和天皇の弟）は枚方町伊加賀の万里荘に１ヵ月滞在し、前年に開通したばかりの先代の枚方大橋を渡り、城跡にあった工兵第４大隊（後の工兵第４連隊）へ通われたとき、この夕日を何度も見られたことでしょう。

ちなみに工兵隊は明治42年（１９０９年）、高槻町の時代に町の繁栄のため、町民あげて用地を寄付し城址に誘致したそうです。

公園となっている城址には工兵隊のいかついレンガ造りの衛門や歩哨所が保存されています。

工兵隊の衛門
大手門碑の奥

## 枚方宿と高槻藩「御預役所」との関わり

### 城下北のはずれに「御預所役所」があった

高槻藩預所の役所は「御預所役所（おあずかりどころやくしょ）」（以下、「御役所」（おやくしょ）と呼ばれていたようです。城下絵図に外濠の外、北西方向のはずれ紺屋町（こんやまち　現在も町名が残る）に「御預所役所」の記述があります。（参考　高槻市立しろあと歴史館「常設展示図録」城下絵図）

この地は17世紀後半の絵図では空閑地で、その後、下級武士の屋敷が城の北西、北部に建てられだした後、高槻藩に幕領の管理が初めて委託された（預所とされた）寛政２年（１７９０年）以降に設けられたと考えられるとのことです。「御役所」の御用日は「御役録」（後述）では毎月３日、６日、11日、16日、19日、23日、27日の７日でした。暮れは12月19日まで、年始は1月23日からとされていました。（参考　図録「幕末」しろあと歴史館）

### 実務は「郷宿（ごうやど）」が連絡調整

「御役所」と預所となった村との連絡調整は、「御役所」のある紺屋町に近い町屋の並ぶ川之町（現在の城北町）の「郷宿」丹波屋四郎兵衛が務めました。

「郷宿」は江戸にあった公事宿のように公事訴訟や裁判のため村から城下へ来た人が宿泊、利用しました。事務を民間に前裁きさせたのです。例えば枚方宿の宿場役人は、訴願となればあらかじめ丹波

屋に出向き、当主の聴取を受け、書類を作成し、当主が「御役所」と調整したうえ、指定の御用日に「御役所」に出頭しました。

丹波屋は毎年「御役録」という木版刷り半紙大のチラシを発行しました。このチラシには高槻藩の重臣、役人名簿、「御役所」の担当藩士の氏名、「御役所」の御用日などが記載され、預所の各村に配布され、各村ではこのチラシで得た情報をもとに丹波屋に出かけたのです。村同士の小紛争については丹波屋段階で解決するような役割も持っていました。

丹波屋の当主は世襲とされ「郷宿」のノウハウを持ち続け、業務の便宜のために藩もそれを望んだのです。藩からの廻状、触書も丹波屋を通じて村に出されました。こうした扱いは明治になるまで続きました。（参考　市史年報第12号「高槻藩の預所支配と天保改革」）

ところで高槻と枚方は、淀川を挟むためか、市や市民との交流があまりないようです。それともかつての支配される側と支配する関係が影響しているのでしょうか。「枚方大橋」という橋名についても高槻の人には気分が良くないという噂があるようです。

## 機関誌の文責について

本誌「宿場町ひらかた」の文章のうち、著者名のあるものは、投稿された原文をもとに編集しています。編集の都合上、少し原文と異なる部分もありますが、変更後も著者の確認を得ており、文責は寄稿者にあります。ご了承ください。

## 新入会員紹介

（令和元年9月月4日現在）

高田　靖さん　香里園山之手町
中原　照文さん　宮之阪
上地　勉さん　池之宮
柿木　温子さん　北中振
後藤　茂子さん　北中振

## 会員を募集しています

本会は、年数回の講演会や観光バスを利用した他宿場などの日帰り見学会の実施、機関誌（本誌）を発行しています。

会費は3600円（1年度）です。入会をお待ちしています。ご希望の方は、電話（832）5722上野まで。